

# 講義形式別にみた助産学生の 自己満足度と達成度の関連 - 助産診断技術学 I (妊婦) での取り組み -

藤田小矢香

## 概 要

助産学生18名を対象に、妊娠期における学習や教授方法の見直しの検討と、春学期終了時の学生の自己学習力を把握し修了までに必要な学習課題を明らかにする目的で調査を行った。質問紙調査は、日本語版Self-Directed Learning Readiness Scale (SDLRS) を使用した。講義における自己満足度と達成度はvisual analog scaleを用いた。

自己満足度と達成度は正の相関であった ( $p < 0.001$ )。学生とともに講義を組み立てる共同講義では、講義を行った学生は聴講した学生より自己満足度が高かった ( $p < 0.05$ )。SDLRS平均得点は $189.8 \pm 3.84$ 点であった。

キーワード：

授業改善, 助産学生, 自己満足度, 達成度, 自己学習力

## I. はじめに

平成 22 年 4 月から助産師の基礎教育における就業年数は 6 カ月以上から 1 年以上に延長された。その後、助産師教育の内容の充実を図り、助産学生の実践能力の強化に向けての指定規則の改正がなされた。助産師教育においては「助産診断・技術学」の単位が 6 単位から 8 単位へ、「助産管理」の単位は 1 単位から 2 単位となり、臨地実習においても 9 単位から 11 単位へと変更になった。助産師教育における単位数総計は 23 単位以上から 28 単位以上になった (門脇, 2013)。

臨地実習において指定規則では、学生 1 人につき 10 回程度分娩介助を行わせること、妊娠中期から産褥 1 カ月まで継続して受け持つ実習を 1 例以上行うことなどが明記されている。妊娠期については妊婦健康診査を通して妊娠経過の診断を行う能力を強化する実習とすると明記されており、その采配はそれぞれの学校独自で

行われている。母子の安全を考慮し、母子の力を最大限に引き出す支援は、妊娠期からの関わりが重要である。

助産学生を対象とした調査 (山内, 2007) では、ICM「基本的助産業務に必須な能力」の 4 領域 (妊娠期, 分娩期, 産褥期, 新生児期) のケア項目で学習達成度が一番低かったのは妊娠期のケアであることが示された。その理由は妊婦に個別的に接する機会が限定されるため、学習の反復ができないからだと推察している。妊娠期の実習を通した助産学生の学びの内容 (津間, 2012) として「専門的な技術の実践を通して対象者を深く理解する」「参加者が自ら学び主体的に親になる役割を身につけていく課程を支援する」であった。専門的な技術の実践を行うためには、対象者を含めた理解が大切であり、必要な知識と技術を研鑽する必要がある。実践に向けて主体的に学ぶ力を育成し、課題を自ら解決する基礎知識を修得するために、学内での講義、演習の内容の見直しが必要であると考えられる。助産学生を対象とした調査に、妊娠期の学

習内容について分析したものは少ない。

本調査は、助産診断技術学Ⅰ（妊婦）における学習方法や教授方法の見直しについて検討を行う。従来通りの講義スタイルや演習に加え、講義を学生とともに組み立てる新しい講義形式を助産学講義に取り入れることにおいて助産学生の学習に対する自己満足度と達成度に関係があるのか明らかにする。また春学期終了時の自己学習力を分析し、修了（卒業）までに必要な学習課題を明らかにする。

## Ⅱ. 方 法

### 1. 対象

平成 25 年度島根県立大学短期大学部専攻科  
助産学専攻学生 18 名

### 2. 実施期間

平成 25 年 7 月～ 8 月

### 3. 調査内容

助産診断技術学Ⅰ（妊婦）の講義では、学生自身が講義の目標を記載し、学びの内容、今後の課題、講義に対する自己満足度と達成度を記載し、講義終了後に教員へ提出している。調査では、講義終了後に提出された自己満足度と達成度について、講義形式別に分析する。また、春学期の講義が終了した 7 月に自己学習力について自己記入式質問紙調査を行った。

#### 1) 助産診断技術学Ⅰ（妊婦）授業の目的

助産師にとって必要な妊婦のケアのための助産課程および診察技法を修得する。妊婦やその家族から信頼される助産師になるために確実な理解と技法を身につける。フィジカルアセスメント演習を通して理解を深める。単位数：2 単位

#### 2) 講義方法

助産診断技術学Ⅰ（妊婦）の講義では、個人自己学習、従来通りの教員による講義（以後講義）、学生と教員の共同講義、技術演習（以後演習）で構成されている（表 1）。

#### 3) 講義の自己満足度と達成度

学生は講義前に、学生自身が自身の学習目標を設定する。講義終了後その日の学習内容、今

表 1 助産診断技術学Ⅰ（妊婦）の講義の概要

回数	授業内容	教授、学習方法
1	妊娠による母体の変化	自己学習
2	妊娠期の心理・社会的変化	
3	胎児の成長発達	
4	妊娠期のマタニティ診断の特徴、類型	講義（担当教員）
5	診断類型の理解	
6	妊娠期の診断類型の理解（経過診断）	共同講義
7		
8		
9		
10		
11	妊娠期の診断類型の理解（経過診断まとめ）	講義（担当教員）
12	妊娠期の診断類型の理解（健康生活診断）	共同講義
13		
14		
15	妊娠期のマタニティ診断とケア計画	講義（担当教員）
16		
17		
18	妊娠期に用いる検査法	演習
19	妊娠期に用いる薬剤	
20	妊娠期のフィジカルイグザミネーション	演習
21		
22		
23		
24		
25	事例展開	
26		
27		
28		
29	フィジカルイグザミネーション技術テスト	
30		

後の課題を明らかにし記載している。また、講義における自己満足度、達成度を主観的評価として visual analog scale を用いた。自己満足が不満足または達成度が未達成の場合は 0 点、自己満足度が満足または達成度が達成したと感じた場合には 10 点とした。配点はそれぞれ 0～10 点で換算した。

#### 4) 自己学習力

春学期の講義がすべて終了した後、日本語版 Self-Directed Learning Readiness Scale（以後 SDLRS）を用いて自己学習力に対するレディネス状態を調査した。SDLRS は自己決定型学習のレディネス尺度として Guglielmino らによって開発され、国際的に普及している。日本語版は看護学教育における SDLRS の将来的な活用に向けて、松浦ら（松浦，2003）によって作成された。SDLRS は 58 項目から構成され、17 項目は反転項目になっている。回答は「全く当てはまらない」から「いつでも当てはまる」の 5 段階で評定を定め、得点は最少 58 点、最高 290 点となり、得点が高いほど自己学習力が高いとされる。Cronbach's  $\alpha$  係数は 0.914 であり、尺度の信頼性は確認されている。看護学を

専攻する大学生の分析 (西菌, 2013) では, 共通性の低い 1 つの変数, 問 2 (何を学びたいか知っている) を削除した 57 項目で再分析し, 8 因子で分析を行っている。本調査はこの項目区分で検討を行う。

#### 5) 分析方法

統計ソフト SPSS ver21 for Windows を用いて分析を行った。SDLRS は記述統計, 講義形式別, 自己満足度, 達成度の比較は一元配置分散分析, 自己満足度と達成度の関連は Pearson の相関係数を用いた。共同講義における講義者と聴講者の自己満足度および達成度の比較は T 検定を用いた。有意水準は 5% 以下とした。

#### 6) 用語の操作的定義

##### (1) 自己学習

助産診断技術学 I (妊婦) において助産学を学ぶ前に母性看護学の復習と助産学テキストを用いて, 妊娠期の予習を行い妊娠期への理解を深める目的で, 一定の課題を学生に提示し, 学生個人で講義時間内に学習を進めること。

##### (2) 講義

本調査では, 担当教員が視聴覚教材, スライド, 参考書, 教科書等を用いて従来型の講義形式で講義を行うことと定義する。学生への発問や質疑応答を含める。

##### (3) 学生と教員の共同講義 (以後共同講義)

担当教員と学生によって行う講義である。学生 2 名が 1 組となり, 1 つの講義を担当する。講義の持ち時間は学生が 30 分, 教員が 60 分とした。シラバスの講義内容に沿った内容で学生が講義を行う。講義の内容や組み立ては学生と教員で事前に相談した。

##### (4) 演習

妊娠期で用いられるフィジカルイグザミネーションなどの技術修得のための演習および, 事例を用いた事例展開などのグループワークを含む。

#### 4. 倫理的配慮

研究参加への同意を得る際に, 口頭と文書で研究目的と方法について説明し, 研究への参加は自由意志に基づくものであること, また研究への不参加によってなんら不利益を生じないことを, 研究への参加に同意した後でも, 参加を

取りやめることができ, その際もなんら不利益を生じないことを説明した。また, 研究データの使用目的と管理, 守秘義務について説明した。研究への参加は同意書への署名によって確認した。尚, 春学期の成績入力終了後に研究依頼を行ったため, 学業と研究参加の同意の有無は一切関係ないことを伝えた。本調査は, 島根県立大学研究倫理審査委員会 (承認番号 115) の承認を得て実施した。

## Ⅲ. 結 果

調査協力に同意を得られた 18 名の分析を行った。

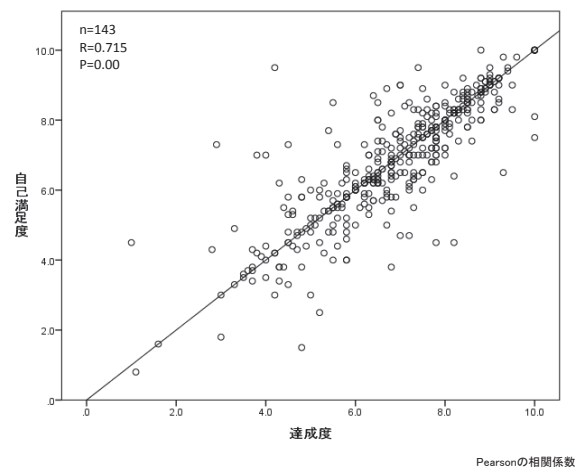


図 1 自己満足度と達成度の相関関係

#### 1. 自己満足度と達成度の比較 (図 1)

助産診断技術学 I (妊婦) の講義全体の自己満足度と達成度では有意に正の相関がみられた ( $p = 0.00$ ,  $r = 0.72$ )。

#### 2. 講義形式別, 自己満足度と達成度の比較

自己学習, 講義, 共同講義, 演習の自己満足度において有意差はみられなかったが, 達成度において有意差がみられた ( $p=0.03$ ) (表 2)。講義形式別では自己学習の達成度が他講義形式に比べ有意に低かった。

表 2 講義形式別 自己満足度と達成度得点

	平均値 ± 標準偏差 n=370				p 値	有意差
	自己学習	講義	共同講義	演習		
自己満足度	6.18 ± 2.00	6.75 ± 1.76	6.86 ± 1.59	7.10 ± 1.73	0.93	ns
達成度	5.89 ± 2.03	6.88 ± 1.56	6.89 ± 1.50	7.03 ± 1.79	0.03	*

一元配置分散分析  
\* $p < 0.05$

表3 共同講義における講義者と聴講者の自己満足度と達成度得点

	平均値±標準偏差		p 値	有意差
	講義者 n=18	聴講者 n=143		
自己満足度	7.18 ± 2.02	6.82 ± 1.53	0.04	*
達成度	7.14 ± 1.58	6.86 ± 1.49	0.57	ns

T 検定  
\*p < 0.05

共同講義において講義を行った「講義者」18名と講義を受けていた「聴講者」延べ143名における自己満足度と達成度の比較では、自己満足度に有意差がみられた (p = 0.04)。「講義者」は有意に自己満足度が高かった。達成度では有意差はみられなかった。

3. 共同講義における「講義者」と「聴講者」の比較 (表3)

表4 自己学習力得点

	平均		SD		n = 18	
	平均	SD	高得点項目	低得点項目		
学習への愛着	3.41	0.52				
問24 常に新しいことを学んでいる人を素晴らしいと思う	4.33	0.97	○			
問49 ひとりの人間として成長し続けることができるようにもっと学びたい	3.94	0.73	○			
問17 学びたいことが沢山あるので一日の時間がもう少し長ければよいのと思う	3.78	1.48	○			
問25 新しいことを学ぶには様々な方法がある	3.78	1.00	○			
問26 勉強していることは自分の長期的な目標と結びつけている	3.67	1.03	○			
問46 学べば学ぶほど世界はおもしろくなる	3.61	0.78	○			
問14 興味を持っていることなら難しい勉強も苦にならない	3.56	0.78	○			
問54 学習は人生の道具である	3.39	0.78				
問1 生きている限り、学ぶことを楽しみたい	3.28	0.75				
問39 困難なことはチャレンジでありストップサインではない	3.28	1.07				
問45 新しいことを学びたいという欲求がある	3.28	0.58				
問28 問題について答えを探し出すことは楽しい	3.22	0.65				
問52 どんなに年老いても新しいことを学ぶだろう	3.11	0.76				
問47 学習は楽しい	2.83	0.62				○
問55 毎年、いくつかのことを独学で学んでいる	2.28	1.02				○
基本的な学習能力と活用能力	3.01	0.29				
問21 何か学習する必要があるれば、自分でもわかる	3.61	0.78	○			
問51 学び方を学ぶことが、私には必要だ	3.61	0.92	○			
問40 自分がすべきだと思うことを実行できる	3.33	0.69				
問4 学びたいことがある場合、その学習方法方法を見つけることができる	3.22	0.55				
問27 知る必要があることは、ほぼ何でも勉強することができる	3.17	0.79				
問18 学習しようと決めたことがあれば、たとえどんなに忙しくても、そのための時間を作ることができる	3.12	0.99				
問10 ある情報を知る必要があるれば、私はその情報をどこで得られるのかわかる	2.83	0.62				○
問57 クラスの中でも自分一人の時間でも、効果的な学習ができる	2.78	0.88				○
問33 基本的な学習方法には問題がない	2.61	0.78				○
問38 自分が知るべきことをみつけようとする点で、すぐれている。	2.33	0.59				○
問11 ほかの多くの人達よりもうまく自己学習ができる	2.00	0.59				○
学習における主導権と独立	3.83	0.46				
問20* もし、私が学習しなくても、自分のせいではない	4.72	0.58	○			
問56* 学習は、人生にそれほど変化をもたらさない	4.33	0.91	○			
問23* 図書館は退屈なところだ	4.11	1.02	○			
問35* その分野の知識がある人達に、誤りを指摘されるのを私は好まない	3.94	0.94	○			
問29* 正解がひとつではない問題には取り組みたくない	3.50	0.86	○			
問32* ほかの人はほとんどは学習に興味をもっていない	3.39	0.78				
問22* もしテストでよい点を取れるくらいに理解できていれば、多少疑問が残っていても気にしない	3.33	1.03				
問53* 常に学習するのは退屈だ	3.28	0.90				
効果的な学習者であるという自己概念	2.98	0.40				
問9* 自分一人ではうまく学習できない	3.44	0.71				
問12* もし、私にすばらしい考えがあったとしても、自分に考えを実現する計画を立てられるとは思わない	3.11	1.08				
問44* うまくいくかどうかかわからない学習状況は好きではない	3.11	0.90				
問6* 私は、新しい学習課題にとりかかるには、すこし時間がかかる	2.83	1.15				○
問19* 私は、読んだことを理解するのが苦手である	2.78	1.11				○
問7* 教師は学生に何をやるのかの指示を与えてほしい	2.65	0.79				○
問48* いつも新しい方法を試すよりは、よく知られた学習方法どおりやる方がよい	2.61	0.61				○
学習に対する責任の受容	3.61	0.85				
問50 自分の学習に責任を負うのは、自分であり他人でない	3.89	1.37				
問15 自分が学ぶことについて責任を負うのは、自分以外の何物でもない	3.89	1.02				
問16 自分の学習がうまくいっているかどうかを言うことができる	3.06	1.06				
創造性	2.77	0.64				
問37 将来について考えることが好きだ	3.44	1.12				
問30 私は何事にも好奇心がおう盛だ	2.89	0.76				○
問31* もう学習しなくてもよくなったなら、うれしいだろう	2.83	1.34				○
問34 結果の見通しがつかない場合でも、私は新しいことをやってみるのが好きだ	2.67	0.77				○
問36 私は、何をやるにもユニークな方法を考え出すのが得意だ	2.00	0.84				○
学習の機会の開拓	2.65	0.91				
問13 学習内容や学習方法の決定に参加したい	3.06	0.94				
問43 考えを討論するのは楽しい	3.00	0.77				
問41 問題を調べる課程は楽しい	2.89	0.68				○
問42 グループで学習において、リーダーとなることが多い	2.33	1.09				○
未来に対する積極的な志向性	2.74	0.37				
問3* わからないことは避けようとする	3.39	0.78				
問58 常に学習する人はリーダーになる	2.56	1.04				○
問8 「何が私(自分)なのか…」と自己存在について考えることがすべての教育の中心であるべきだと思う	2.28	0.83				○
合計得点	189.80	3.84				

\*: 反転項目

#### 4. 春学期終了時の自己学習力 (表 4)

自己学習力を示す SDLRS の得点合計は 165 点から 217 点の範囲であり、平均得点は 189.8 点であった。

項目得点平均値と標準偏差 (以後 SD) の関係からカテゴリー化を行った。項目得点の平均値 3.27 点 (SD0.27) より、低得点項目は 3.00 点以下とし、高得点項目は 3.54 点以上とした。高得点項目では「学習に対する責任の受容」で 3 項目中 2 項目 (66.7%), 「学習における主導権と独立」で 8 項目中 5 項目 (62.5%), 「学習への愛着」で 16 項目中 7 項目 (43.8%), 「基本的な学習能力と活用能力」で 11 項目中 2 項目 (18.2%) であった。

低得点項目を多く含んでいた因子は「創造性」で 5 項目中 4 項目 (80%), 「未来に対する積極性」で 3 項目中 2 項目 (66.7%), 「効果的な学習者であるという自己概念」で 7 項目中 4 項目 (57.1%), 「学習の機会の開拓」で 4 項目中 2 項目 (50%), 「基本的な学習能力と活用能力」で 11 項目中 5 項目 (45.5%), 「学習への愛着」で 16 項目中 2 項目 (12.5%) であった。

8 因子内の平均得点が 3.5 以上の高い値を示していた高得点因子は「学習における主導権と独立」「学習に対する責任の受容」の 2 因子であり、平均得点 3.0 点以下の低得点因子は「効果的な学習者であるという自己概念」「創造性」「学習の機会の開拓」「未来に対する積極的な志向性」の 4 因子であった。

## IV. 考 察

### 1. 自己満足度と達成度の比較

助産診断技術学 I (妊婦) の講義全体での学生の自己満足度と達成度は正の相関関係がみられた。看護学の臨地実習における実習達成度評価と実習満足度には相関がみられなかった (片山, 2003)。本調査では、学生が自ら講義における目標を立てており、目標が達成できたかどうかは主観的な分析を行ったのに対し、先行研究では達成度は評価基準が項目で設けられており、客観的な分析を行っていた。実習では自己満足度と達成度に関係はみられないが、講義においては関係があることから講義における自己

満足度や達成度を高める工夫が必要である。学習において学生個人が目標を設定しやすいように、講義内容をより分かりやすくシラバスに掲載する、次の講義内容を事前に提示するなど具体的な改善を検討したい。

### 2. 講義形式別、自己満足度と達成度の比較

講義形式別において、達成度で有意差がみられた。自己学習では達成度が低い結果であった。吉川ら (吉川, 2012) は、自己学習について動機付けと探索的活動方法の具体的な指導が必要だと述べている。自己学習を設定した時期は、妊娠期の講義の初回から 3 回目までであった。一定のテーマを提示しているが、教科書の範囲が広く感じられることや、入学後早期であり、自分で学習の目標を設定することが難しいことが影響した可能性がある。臨地実習効果を高めるために授業方法を工夫した調査 (岡田, 2007) では、学生が実習項目ごとに役立った授業は主要な実習項目のすべてにおいて技術演習、課題学習、自己学習とあげていた。目的が明確な実習での自己学習は効果的なことから、自己学習を何の目的で行うのか、どのように役に立つのか学生に伝える必要がある。学生への自己学習課題の提示方法と自己学習を取り入れる時期について検討が必要である。

今回、新しく取り入れた学生と教員の共同講義は従来どおりの講義や演習と有意差がみられていないことから、今後も講義方法の 1 つとして積極的に取り入れていくことができると考える。

### 3. 共同講義における「講義者」と「聴講者」の比較

共同講義において、自己満足度で有意差がみられた。達成度では有意差はみられなかった。今回「講義者」は予定された講義の日までに、教科書や参考書、書籍などで情報を収集し、分かりやすく伝える工夫や、どのような講義をしたら聴講者が理解しやすいのか検討し準備を行っていた。また内容が十分に理解できないものについては、教員と何度もディスカッションを行い、講義への不安を解消していた。講義では聴講者に疑問を投げかけたり、ロールプレイ

を行ったり、考える機会を与えたりと参加型になるような工夫もみられた。学生が実際に講義を行う事で、より分かりやすく伝えるためにはたくさん知識が必要であると自覚したことで、自分たちで資料を収集し、資料や文献を熟読する機会となったと考える。聴講者は、講義の質問なども積極的に行い、意見なども率直に述べていた。学生がグループで講義を行った研究(大森, 2008)において、満足度のもたらす意味は、今後への学習意欲への影響であると報告している。学生との共同講義は学生が主体的に講義に取り組めるきっかけとなると考える。学習への理解を深め、楽しく学べる、学習がおもしろいと実感できるよう、共同講義での学生の持ち時間、内容等検討が必要である。

### 3. 春学期終了時の自己学習力

自己学習力を示す SDLRS の得点は平均 189.8 点であった。臨床で働く看護師を対象とした調査(永野, 2002)では開発者が提示している自己学習力が平均以上および高いことを示す 227 点以上を獲得した者は、全体の 4.4% であった。

本調査では、227 点以上の学生はいなかった。自己学習力はまだ発達途中であると考えられる。

助産学生の入学時と終了時の SDLRS 調査(山内, 2007)では、入学時と終了時の SDLRS 得点はそれぞれ 205.4 点、201.0 点であった。特に、入学時に SDLRS 得点の低い助産学生に対しては、自己効力感を高め、基礎学習技法の活用と学習における主体性を育成する教育支援が必要であると示唆している。本調査では、入学時に調査していないが、先行調査と比較し SDLRS 得点は低かった。入学時から学生の学習状態を把握し、講義、演習、グループワークにおいて主体的に学ぶ姿勢や学習方法について検討する必要がある。

因子平均得点が 3.5 点以上の高得点因子は「学習における主導権と独立」「学習に対する責任の受容」の 2 因子であった。先行研究(西菌, 2013)における看護大学生の調査では、特に「学習に対する責任の受容」が高得点を示しており、学ぶことは自己責任であるという意識と職業選択に結びつけられたキャリア意識が備わってい

ると示唆している。助産学生は、看護の学習を終えている。キャリア意識としては、看護を学習した中で意識づけられていることも考えられるが、より専門性を持った助産学を学ぶことでさらに深められた可能性もある。

反対に平均得点が低得点であった因子は「効果的な学習者である」という自己概念」「創造性」「学習の機会の開拓」「未来に対する積極的な志向性」の 4 因子であった。先行研究(西菌, 2013)による看護大学生 2 年前期の因子別平均得点と本調査の比較では、「学習における主導権と独立」以外の 7 項目で平均を下回っていた。本学助産学生は自己学習力が低い傾向にあり、その原因について、今後検討が必要である。

「基本的な学習能力と活用能力」の中で低得点であった項目は〈ある情報をする必要があれば、私はその情報をどこで得られるのかがわかる〉〈基本的な学習方法には問題がない〉〈自分が知るべきことをみつけようとする点で、すぐれている〉〈他の多くの人達よりもうまく学習できる〉であり、先行研究(西菌, 2013)と同様な結果であった。これらについて西菌(西菌, 2013)は伝統的な教科の講義スタイルに慣れてきた学生が、大学入学当初の短期間での学習方法の転換を図ることが難しいと示唆している。本学助産学生は看護系大学、短期大学、専門学校等で看護を学んできている。講義方法も学校により異なっていると思われ、従来通りの講義スタイルが多いことが伺える。また、秋学期から本格的な助産学実習が控えているため、春学期に多くの講義が集中している。ディスカッションを多く取り入れた講義や演習等事前に準備が必要な科目も多い。課題解決に向けての探求方法やどのように学習を深めていけば良いのか分からないまま学習を進めている学生が多いと推察される。関連させて調べる方法やわかりやすいキーワードの提示、教材の工夫等改善が必要であると考えられる。

## V. 研究の限界

今回は、本学助産学生 18 名を対象とした調査であり、講義形式変更による学習の効果や課題の確証には至っていない。また、自己学習力

においては、調査の途中である。引き続き調査を行い、効果的な学習・教育方法の検討を行いたい。

## VI. まとめ

本調査は、助産診断技術学 I (妊婦) における講義形式別にみた助産学生の自己満足度と達成度について検討を行った。自己満足度と達成度は正の相関であった。新しく取り入れた学生との共同講義は、従来の講義と自己満足度や達成度に違いはなかった。共同講義を行った学生は自己満足度が高いことから、今後の学習意欲を高める 1 つの方法として共同講義は意義があると考えられる。自己学習においては、他の講義形式より達成度が低いことから、実施時期、学習の目的や自習方法について具体的に提示する必要がある。自己学習力は、キャリア意識としては意識づけられているが、課題解決に向けた探求方法や学習方法を身につけることは今後の課題である。

導入による臨地実習効果の検討 - 学生による授業評価を通して - , 16, 66-71.

大森智美, 宍戸路佳, 岡部恵子 (2008): 「学生による講義」の評価 - 母性看護学概論の中での試み -, 埼玉医科大学看護学科紀要, 1 (1), 35-41.

山内まゆみ (2007): 助産学生の学習達成度とその関連要因の分析, 旭川医科大学研究フォーラム, (8) 1, 25-35.

吉川峰子, 廣部すみえ, 斎藤等 (2012): 学生の授業満足度と授業評価・学習評価・教員評価との関連 - 在宅看護学の授業展開から -, 新田塚医療福祉センター雑誌, 9 (1), 17-24.

## 引用文献

門脇豊子, 清水嘉与子, 森山弘子 (2013): 看護法令要覧平成 25 年度, 88-91, 株式会社日本看護協会出版会, 東京.

片山由美, 奥津文子 (2003): 臨地実習目標達成度評価と実習満足度との関連 - 学生の満足度を組み入れた臨地実習目標達成度評価の一考察 -, 京都大学医療技術短期大学部紀要, 23, 41-43.

松浦和代, 阿部典子, 良村貞子, 他 (2003): 日本語版 SDLRS の開発 - 信頼性と妥当性の検討 -, 日本看護研究学会雑誌, 26 (1), 45-53.

永野光子, 舟島なをみ (2002): 臨床看護婦・士の自己学習力と看護婦・士特性の関係, 順天堂医療短期大学部紀要, 13, 1-10.

西園貞子 (2013): 看護大学生における自己学習力の変化と検討, 大阪医科大学看護研究雑誌, 3, 90-99.

岡田公江, 西海ひとみ, 奥村ゆかり, 他 (2007): 母性看護における臨場感を高める授業方法

**The Relationship Between Student Midwives’  
Degree of Self-Satisfaction and Achievement,  
According to Lecture form  
– The Trial in Lecture of Diagnose and Practice of Midwifery –**

Sayaka FUJITA

**Key Words and Phrases**

Lecture improvement, Midwife students, Self-satisfaction, achievement,  
SDLRS(Self Directed Learning Readiness scale)